

# アトリエ 琉游舎 だより 60号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/) 2019年8月28日発行  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## 琉游舎 だより 1周目完走

- 琉游舎だよりが60号を迎えました。60は日本人の数字の概念のなかでも重要なものの一つです。十干と十二支の組み合わせで60干支。60回で一周します。還暦です。干支を一回りしたわけですから、琉游舎だよりは60号で一周目を完走したことになります。
- 琉游舎だより癸亥号（60号）は己亥年（2019年）丁酉の日（8月28日）発行です。60干支を使った表記が正確かどうかは分かりませんが、何はともあれ、還暦の日を迎えられ一周目を完走できたのも皆さんに読んでいただいたお陰です。ありがとうございます。
- 60干支の数え方は、数学的に言えば60進法ですね。1時間は60分、1分は60秒。時の単位が60進法によって表されているという事実は、人間の時間感覚と60や6との数字の親和性が高いという証拠ではないでしょうか。1日は24時間（6×4）、1年は12ヶ月（6×2）。
- 60や6という数字と人間の時間との関係は偶然か、はたまた私の思い入れの産物かも知れませんが、しかし60号という数字が一区切りであることは間違いありません。一周目は試行錯誤、前に道が続いていると信じて走ってきて、何とか完走できたというところが正直な感想です。さて、それでは二周目はどんな走りをして行きましょうか、、、
- 道のあるがまま、指し示すままに、ゆっくり、休まず、そして時には大胆に走って行くことができたならば、二周目も完走できるはずと信じて走り続けたいと考えています。
- 二周目に入る琉游舎だよりを、これからも宜しくお願いいたします。

### 9月のスケジュール

9月のスケジュール			木	金	土	日
月	火	水	29	30	30	9月1日
2	3	4	映画会 13:30	6	7	8
9	10 読書会 13:30	11	映画会 13:30	13	14 詩話会 13時半から	15
16	17	18	映画会 13:30	20	21	22
23 彼岸会法要 10時半	24 読書会 13:30	25 居酒屋の会 16時から	26 映画会 13:30	27	28	29
30	10月1日	2	3 映画会 13:30	4	5	6

**彼岸会法要**  
9月23日(月)  
10時半から

**写経会**  
9月1日(日)  
13時半から

**読書会**  
9月10日(火)  
9月24日(火)  
13時半から

**詩話会**  
9月14日(土)  
13時半から

**居酒屋の会**  
9月25日(水)  
16時から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

雪山偈という4句の偈が涅槃經の中にあります。お釈迦様が過去世に雪山童子として修行中、羅刹（人を食う悪鬼）から「諸行無常・是生滅法」という言葉を聞きました。童子は後半部分を教えて欲しいと羅刹に求めると、おまへの軀と引き替えならば教えてあげようと言われ、童子は残りの2句「生滅滅已・寂滅為樂」を聞くとそこで約束通り崖の上から羅刹の口もとに飛び込んだのです。とその瞬間、羅刹は帝釈天に姿を変え童子の軀をしっかりと受け止めて礼拝したというお話。絵に描かれたり、道德の教材などに取り上げられて聞いたことがあるかも知れません。この話は童子(お釈迦さま)が真実の法(仏法)を知るためには命をも投げ出す話として読まれますが、私はこの4行の偈に「生死不二」の真理が語られていると考えます。

「諸行無常(しょぎょうむじょう) 是生滅法(ぜしょうめつぼう)」全ての事象は移り変わる。生じては滅することがその本性である。と前半部分で言っています。私達の生きている世界には何一つ同一不変のものはないのです。だから「生」は「苦」であるという認識です。「生滅滅已(しょうめつめつ) 寂滅為樂(じゃくめついらく)」生滅することがなくなり、滅び去った後にくる本当の静けさにこそ、求むべき真の喜びがあると後半の2句は述べています。ここでいう「寂滅」は「涅槃」と言うことです。これを物理的な死と取ってしまうのは余りに浅薄な理解でしょう。現実の生活の中でこの言葉を捉えないと、ただ虚無的な言葉、人間は死ぬば楽になれるのだ、と言う意味に聞こえてしまいます。宗教は生きている人たちのものです。死ぬことを推奨する宗教などというものはそもそも存在するはずがありません。人は生きているからこそ「苦」も「楽」も「喜」も「悲」もあるのです。死んだら何もありません。何もないのであれば、そこは安らぎの処でも何でも無い何もない場所です。ですから「涅槃=死」の状態ではありません。涅槃は執着の炎(煩惱)を消し去った安らぎの状態を示す言葉です。ただそれが物理的な肉体がある間は不可能だと考える人たちにとってはいつの間にか「涅槃=死」と認識されるようになってしまったのです。

私は仏道に入り宗教家の道を歩み始めて以来ずっと疑問だったことは、なぜ「涅槃=死」という認識が生まれてしまったのかということでした。日々を毎日心豊かに暮すための糧として宗教があるべきなのに「現実の生活は『苦』だらけで死ななければ『楽』にはなれないですよ」というような宗教を信ずることができのでしょうか。少なくともその様な宗教を私は信ずることができません。なぜその様な認識が生じたのか、それは「涅槃」を語る人たちが「生死不二」を信じずに「生」の側からだけ雪山偈を読んでいるからです。宗教のほとんどは「生」の側から「生」を見ていく宗教だと考えます。論証のない認識ですが、お釈迦様は「死」の側から「生」を見ていたのではないのでしょうか。人は必ず死ぬるものである。そしてその死を「ああとでも良い『生』を過ごすことが出来て楽しかった」と安らかに迎えられるために、現実の生きている世界をありのままに観ることの必要性を説いたのです。そのありのままの「生」の世界が「諸行無常・是生滅法」です。そして「死」の側から「生」を見た言葉が「生滅滅已・寂滅為樂」です。ここで説かれる「死」は「煩惱の死」です。人は日々「煩惱の生」と「煩惱の死」を絶え間なく繰り返し、そして最終的に「肉体の死」を迎えるのです。「生死不二」を信ずるということはこのことを信ずるということです。

「肉体の生」がある限り「煩惱の死」を迎えることはとても困難なことでしょう。かといって「煩惱の死」=「肉体の死」と安易に結論づけてしまったら、娑婆世界と信仰の世界の狭間で生きる一人の人間の「生死」の不安や葛藤を無視することになってしまうのです。その結論はどんなにもっともらしい崇高な教えで言いくるめようが結局「死んだら楽になれるよ」ということなのです。宗教家は人々の生活の安寧を願いそして自ら行い導く人であるはずで、「煩惱の生」と「煩惱の死」を絶えず繰り返しながら「肉体の生」を豊かに楽しく心安らかに過ごし、そしてよき「肉体の死」に至ることができる。この「信」があって初めてお釈迦様の真理の法、つまり「諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為樂」を受持し行い導くことができるのです。そしてその様な人だけがお釈迦様と共に歩むことができる人なのです。

親鸞聖人が弟子の唯円から「私は念仏を唱えても喜びを得られず、極楽に生まれたいとも全く思わないのです。どうしてでしょうか」と質問されると「私(親鸞)もそう思っていたのだが、おまえもやはり同じ気持ちだったんだな」と答えられました。<sup>注1</sup>極楽が理想の世界と信じていても、生ある限りはこの娑婆世界になんとしてでも生きていたいという、あたり前の人としての素直な告白です。私はこの親鸞聖人の言葉に娑婆世界の中で葛藤しそして揺るぎのない「信」を獲得した宗教者の人間としてのあるべき姿があるがままに頭われていると考えます。私にはこの親鸞聖人の言葉を解説することができません。なぜなら「信」は言葉ではなく行いだからです。もしあえて言葉にするとすれば、親鸞聖人も「死」の側から「生」を見ることで「生死不二」を悟り、そして念仏によってそれを実践したということだと思えます。

私は日蓮宗から正式に認められた僧侶です。その人間が他宗派の宗祖の言葉を受持するとは何事かといぶかしがり怒る方もおられることでしょう。私は「生死不二」を明らめるためならあらゆる行いにも歩み出すでしょう。「生を明らめ死を明らしむるは、仏家一大事の因縁なり」<sup>注2</sup>「妙法蓮華經と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり」<sup>注3</sup>道元も日蓮も皆同じことを言っています。 **琉游舎：戸井 出琉・恭子**  
「生死」を明らめることが宗教家の唯一無二の役目なのです。**お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152**